

戦争ドラマスペシャル

横山ゆずり作 「戦 争」

<前編>「アーミーシャツはカッコいい？」

先生 ...というわけで、応仁元年、細川氏と山名氏の権力争いが起こった。これが“応仁の乱”ですね。そして、この動乱をきっかけに、いわゆる“戦国時代”に突入するわけです。ところで、この時、細川勝元は...。(FO)

長谷川晃一 (モノローグ) あーあ、日本史なんて、たるいなあ。戦国時代かあ。そう言や、「戦国自衛隊」って映画、あったっけ。ありゃ結構迫力あったよな。(あくび)

先生 では、教科書の72ページから読んでもらいましょう。えーと長谷川晃一君。

友子 (小声で) 長谷川君。ちょっと、当たったわよ。起きなさいよ。

晃一 (あくび) なんだよう。

友子 (小声で) 読むのよ、72ページから。

先生 長谷川君、欠席ですか？ 長谷川晃一君！

晃一 は、はい！「戦国自衛隊」です！

一同 (笑い)

先生 何 寝言 言ってるんですか。顔でも洗っていらっしゃい。

晃一 す、すみません。

(効果音) (終業のチャイム)

先生 それじゃ、今日はここまで。

(効果音) (ガヤ)

晃一ナレーション おれは、長谷川晃一。青春高校2年。学校に来て一番燃えるのは、部活の時。それと、弁当の時間。だから、授業中はついついゆっくりと休養をとってしまうのだ。...やべえかな？

雄二 おい、長谷川。お前、1時間目から寝るなって。ヒンシュクだぜ。

晃一 マイったぜ。急に当たってよ。

友子 人がせっかく起こしてあげたのにさ。

雄二 (先生のマネ)「顔でも洗っていらっしゃい！」(笑い) けどお前、いくら戦国時代のこと習ってるからって、「戦国自衛隊」の夢見るなんて、単純なんだよ。

晃一 でも、あの映画、結構よかったぜ。戦闘シーンなんか、特撮あってよ。

友子 古い古い。今はなんとって「ターミネーター」よ。もうド迫力でさ。あたし、ほとんど目つぶってた。

雄二 パーカ。目つぶって映画見てどうすんだっつうの。やっぱ女には、“戦いにかかる男のロマン”は分かんねえだろうなあ。去年見た「ゼロ戦燃ゆ」なんか、ぐっと来たもんな。

晃一 そういうこと。おれなんか、ほら、このシャツ見てくれって。  
友子 何よ。汚いシャツじゃない。あ、ヤだ。血の跡が付いてる。  
晃一 トーゼン。ホンモノのアーミーシャツだぜ。いとこがさ、米軍の古着屋で買ったやつをくれたんだ。きっと、これを着てたアメリカ兵も、戦闘機に乗ってよ、ひょっとしてゼロ戦と一騎打ちしてよ、「ダダダダダー！」  
友子 野蛮ねえ。  
雄二 そ、そいで、日本上陸して、横須賀辺りで遊んでな。「ヘイ、カモーン」とかよ。  
晃一 オー、プリーズ、ギブミー、チョコレート！（笑い）  
伊藤直美 やめなさいよ、長谷川君たち。  
晃一 な、なんだよ、伊藤。  
直美 あんたたち、よくそんなことで笑えるわね。軍隊や戦争が、そんなに面白いの？  
雄二 冗談だよ。  
直美 冗談言っていることと、悪いことがあるわよ。本当の戦争なんてね、そんなカッコいいもんじゃ絶対ないんだから。あんたたち、少し軽いわよ。  
雄二 ちえ、なんだよ伊藤、そんなマジになるなよ。  
ナレーション クラスの伊藤直美は、言うことがキツイ。それがまた、当たっているだけに、しゃくに障る。「確かにおれたちは、軽いかもしれない。だけど、仕方ないじゃないか。おれたちにとっては、“戦争”なんて、はるか昔の、映画の中の話って感じしかしないんだから。伊藤だって同じだろ」って、そう思った。そう、あの時までは…。  
(効果音) (暑い夏の日の駅前の雑踏)  
ナレーション あれは、夏休み、8月の暑い日だった。部活の帰り、駅前を通りかかると、街頭演説が聞こえてきた。別に興味もなかったが、それとなく足を止めた。  
学生 A 戦争反対の署名にご協力くださいーい！  
学生 B よろしくお願いします！  
学生 C どうぞお読みください。  
学生 D(スピーカー) わたしたちは、今、平和な国家に暮らしていると思っています。しかし、本当にそうなのでしょうか？ 現在、国家予算の中で…。(F0)  
晃一(モノローグ) この暑いのに、よくやるなあ。大学生かな。ああ、そう言や、今月の15日は“終戦の日”だっけ。でも、あんまりピンと来ないけどなあ。何せ40年前じゃよう。  
直美 長谷川くーん。長谷川君じゃない。  
晃一 伊藤。  
直美 部活の帰り？  
晃一 ああ。お前こそ、こんなところで何してんだよ？ あ、それは？  
直美 これ、チラシよ。長谷川君も読んでみて。はい。(渡す)

晃一 「本当の平和を求めて」。へえ、お前、こんなことやってんの。

直美 まあね。ほら、15日は敗戦記念日でしょ。こういうときでもなきや、みんな、戦争について考えもしないもんね。

晃一 ちえ、皮肉かよ。だけどおれ、その“敗戦”って言い方、ヤだな。なんか、惨めな感じするじゃん。

直美 あら、それが事実よ。そういうふうに、戦争の惨めさから目をそらすのって、一番いけないと思うな。“負けた”って事実認めないで、“終わった”なんて言うから、“また始めよう”なんて気になるのよ。

晃一 わ、分かったよ。だけど、そんなビラ配りまでやってるなんて、知らなかったな。だからあん時、すげえ怒ったんだ。

直美 あ、学校で、長谷川君たちがふざけてた時？ だってさ、アーミールックとか言ってやたらイキがっちゃって、ちっとも分かってないんだもん。あの血の跡は、戦争でだれかが傷ついたってことよ。死んだかもしれないのよ！

晃一 うん。かもな。あん時は、「あんたたち、軽いわよ」なんて言われちゃってよ。ちょっとムカついたけどさ。でも、あれからおれも、少し考えちまったぜ。

直美 ごめんごめん。あたしだって、前は、割と無関心だったんだ。だけどね…。(F0)

ナレーション その日、おれは、本当に久しぶりに、マジになってしゃべっていた。伊藤の真剣な態度に、思わず圧倒されていた、というのが正直なところだが。伊藤は、なんでも、おじいさんから戦争の話をよく聞かされたとかで、話しているうち、「ぜひあんたも会ってみて」なんてことになり、その日、結局おれも、伊藤の家に一緒に行って、おじいさんに会うことになってしまった。おれはもともと、年寄りに話を聞くのが嫌いだった。大体年寄りの戦争体験と言えば、「おれたちの若いころは大変だった」とか、「今の若い者は苦労も知らない」とか、相場は決まってる。“おれたちだって、何も好き好んで、平和な時代に生まれたわけじゃないんだ。”いつも、そんな反発を感じてしまう。だけど、伊藤のおじいさんの話は違っていた。

(効果音) (玄関の戸が開く)

直美 ただいま！ おじいちゃん、いる？ あのね、高校の友達の長谷川君。おじいちゃん、ちょっと話してあげて。

晃一 お邪魔します。

直美の祖父 ああ、いらっしゃい。ま、上がりなさい。こんな年寄りの話を聞いてくれるなんて、うれしいねえ。

(音楽) (ブリッジ)

祖父 そう、あれは、もう40年も前のことだな。わたしは、当時、高等小学校の教員をしとった。あのころは、日本中が、戦争のために動いていた。「一億玉砕、火の

玉だ。」そんな時代だったな。お国のため、天皇陛下のために、この戦いを戦い抜いて、鬼畜米英のやつらを倒し、大東亜共栄圏を築くこと、それが、国民すべての使命じゃった。もちろん、わたしら教師も、「そのために尽くすように」と生徒に教えとったんだ。それはもう熱心にやとった。わたし自身、“天皇陛下のために、命を落とすなら本望だ”と本気で思っておったから、自信を持って生徒にも教えたもんだ。わたしの教え子の中で、その教えのとおり自ら志願して、命を捨てていった若者たちが、何人いたことか…。それが、どうだ。(深いため息)

忘れもしない、あの、昭和20年の8月15日。あの日を境に、わたしらの、それまで信じてきたものの一切は、全く否定されてしまったのさ。突然の価値観の転換。平和主義、民主化。だがわたしはそんなものに、要領よく乗っていけるほど、安易な生き方をしては来なかった。なまじっか、真剣に、クソまじめに軍国主義に浸りきってきただけに、わたしはすっかり打ちのめされてしまった。昨日まで教えてきたことを、「あれは間違いだった。忘れろ」と言って、生徒の教科書に墨を塗らせなければならない教師が、どんなに惨めなものか。いや、自分が惨めなだけなら、まだいい。わたしは、何百人もの、何も分からない純粋な子供たちに、「国のために死ぬ」と教えてしまった。壮行会の夜に、「先生の教えのとおり<sup>に</sup>征きます。立派に死んで、護国の神になります」と口々に言った一人一人の顔が、今もはっきりと目に浮かぶ。彼らの大部分は、二度と再び帰らなかった。あの子たちに、わたしは、わたしは、なんとわびたらいいんだ。

…

直美  
祖父

それは、おじいちゃんのせいじゃないわよ。

確かに、わたしら国民は、何も知らなかった。しかし、実際に教えたのは、このわたしなんだ。

それからわたしは、教師を辞めた。いや、生きることさえやめようとした。むなしさと、教え子たちへのすまなさでな。あの時、熱心なキリスト教信者の友達に勧められて、教会へ行かなかつたら、わたしは、この世にいなかったかもしれん。

直美  
晃一

おじいちゃんね、クリスチャンなの。

へえ。…そうか。でもおれ、一つ聞きたいんですけど、その時代に、戦争に反対する人はだれもいなかったんですか？ 戦争って、結局は殺し合いじゃないですか。そんなの悪いことだって、幼稚園の子供でも分かりそうなもんだけど。おれだったら、絶対反対すると思う！ あ、すみません。おれ、つい興奮しちゃって。

祖父

いや、構わんよ。そうさな、確かに、君の言うとおり、今考えると、なんて愚かなことかと思うさ。だがな、そこが戦争の本当の恐ろしさよ。空襲で家を焼かれる。

爆撃で人がたくさん死ぬ。それは恐ろしいことだ。だが、何よりも怖いのは、戦争が人の心を変えてしまうということじゃよ。

晃一 人の心を変えて？  
祖父 ああ。何が本当に正しいのか、分からなくなってしまうのさ。真実が見えなくなってしまうんだよ。  
ナレーション 伊藤のおじいさんの話は、なんだか、ずっしり重い感じがした。それは、今まで味わったことのない、なんかこう、暗い、恐ろしくマジな過去の世界に一步踏み込んだような、不思議な気持ちだった。その日の帰り道、ある事件が起きた。  
(効果音) (雑踏)  
中学生 A やめてください。お金なんか持ってません。  
中学生 B、C、D (口々に)「ない」で済むと思ってんの？」「ふざけんなよ」  
ナレーション おれは、ピンと来た。「かつあげ」だ。近所の中学生たちのようだった。一人に大勢で、きたねえやつらだ。見つけたからには、おれの正義感が黙っちゃいない。おれは、とっさに飛び出した。

#### <後編>「僕らの平和宣言」

ナレーション おれ、長谷川晃一。青春高校2年生。夏休みの部活の帰り、ふとしたことから、同級生の伊藤直美のうちにいき、おじいさんの戦争体験を聞いた。その話は静かで、何か重々しいものを感じた。その帰り道のことだ。  
(効果音) (路上の雑踏)  
女子中学生 A (オフ) やめてください。お金なんか持ってません！  
" B,C,D 「ないわけねえだろ」「うちから持ってこいよ」「なめんなよ」  
晃一(モノローグ) なんだ、あいつら。カツアゲだな。中学生じゃないかよ。しょうがねえな、全く。  
晃一 (駆け寄って) おい、お前ら、何してんだ！  
女子中学生 B ヤバい、高校生だけ。  
" C (晃一に) うるせえな。関係ねえだろ。  
晃一 その子、嫌がってるじゃないか。放してやれよ。  
女子中学生 D こいつは、あたしらのダチだよ。  
" A ち、違います。あたし…。  
" B 騒ぐんじゃねえよ。  
晃一 お前ら、いい加減にしろ！  
女子中学生 C チキショー、邪魔しやがって。  
(効果音) (カバンなどを振り回して晃一に突っかかる。)  
晃一 やめろ、おい、こいつ…。  
女子中学生 D ヤバ、人が来るよ。  
" B クソ、こうなったら、あの手で行くんだよ。…キヤー！ だれか来てえ！

” B,C,D (口々に)助けてえ！ キャー！  
男 (走り寄って)どうしたんだ？  
女子中学生B この高校生が、いきなり飛び出してきて、あたしたちに乱暴しようとして…。  
” C そうなんです。  
晃一 じよ、冗談じゃねえよ。おれは…。  
男 お前、どこの高校だ？！  
晃一 違うよ。そいつらが、カツアゲしようとしてたから、おれ…。  
女子中学生 B,C,D (口々に)「あたしたちを殴ろうとしたでしょ？」「そうだよ。急に襲いかかったじゃないか。」  
晃一 お前ら、よくもそんなこと…。  
男 こいつ、まだ言い訳する気か！(殴りつける)おれと一緒に警察まで来い！  
晃一 放せよ。放せたら！(FO)  
その場の大人 (口々に)「まあ、怖いわねえ、今の高校生は。」「ほんとに、なんてことするんでしょ。」「ちょっと、青春高校の生徒らしいいわよ。」  
ナレーション とんでもないぬれぎぬだった。警察では、初め、全くおれの話の間こうとしなかったが、絡まれていた中学生の証言で、やっと疑いは晴れた。だけど、おれの気持ちは、簡単には晴れなかった。殴られた顔の痛みは消えても、あの時集まってきた人たちの、まるで犯人でも見るような目、突き刺すような、そしてさげすむような視線は、いつまでも、心に痛く刺さっていた。  
(効果音) (玄関を開ける音)  
晃一 ただいま。  
母 晃一、大丈夫だったの？ さっき、警察から電話があって、母さん心配してたのよ。  
父 話は大体聞いた。まあ、とんだ誤解だったようだが、これに懲りて、なんにでも深入りせんことだな。正義感もほどほどにしとかんと、自分が損をする羽目になるからな。  
ナレーション おれは、そんな事なかれ主義のおやじの言葉に、憤りを感じながらも、“もしまた同じ場面に出くわしたら、見て見ないふりをするかもしれない”とも思った。どなられるのも、殴られるのも、怖くはない。だけど、人を助けようとしたのに、正しいことをしたのに、人々のあざけりの中にさらされるのだけは、もうごめんた。  
晃一(モノローグ) ちえ、おれもヤキが回ったもんだ。からっきし意気地がなくなってしまったな。チッキショー、情けねえな。  
ナレーション 後味の悪い事件を引きずって、夏休みも半分を過ぎたある日だった。  
(効果音) (電話のベル)  
直美 (フィルター音)あ、もしもし、伊藤ですが、長谷川君？

晃一 伊藤、どうしたの？ 元気？  
直美 (フィルター音)うん、元気元気。長谷川君は？ なんか、大変だったみたいね。

晃一 なんだ、知ってたのか。もうマイったぜ。  
直美 (フィルター音)元気出してよ。ところでさ、今時間ある？  
晃一 おれ？ うん、暇だけど。  
直美 (フィルター音)ほんとに？ それじゃ、悪いんだけど、協力してくれないかなぁ。実はね、ほら、前に長谷川君と会った駅前で、署名運動やってんの、反核の、ハンカク？

晃一 (フィルター音)核戦争反対の運動よ。それでね、15日までに、あと2000は集めたいのよね。助けてくれないのかな。

ナレーション どうもおれは、“伊藤に弱い。署名運動なんて、おれのガラじゃない”と思いつつも、ここしばらくのムシャクシャした気分をふっ飛ばしたいという思いも手伝って、とにかく行って見た。いや、本当のところは、今まで信じてきたおれの正義感が、あの事件以来、おれの中で崩れていくのが怖かったのだ。おれは、平和運動で人々の前に自分をさらすことで、もう一度自分自身を試そうとしたのかもしれない。

直美 長谷川くん。こっちこっち。  
晃一 来てはみたけどさ。一体何すんのさ、おれ。  
直美 まずここに自分の名前、書いて。住所もね。それから、通行する人に呼びかけるのよ。

晃一 なんて？  
直美 「反核運動の署名、お願いしまーす！ 平和のための署名にご協力ください」ってね。

晃一 えー、声出すの？  
直美 当然でしょ。照れちゃダメよ。  
晃一 ちえ、マイったなあ。やるよ、こうなったら、なんだって。  
直美 そうそう、その意気よ。それでね、少しでも関心ありそうな人に、このチラシ渡して読んでもらって。

晃一 何々？ えー「核を持つ者は、皆、核で滅ぶ。」へー、なるほどな。  
直美 あ、その言葉はね、うちのおじいちゃんが考えたの。なんでもね、聖書の中に、「剣を取る者は、皆、剣で滅ぶ」という言葉があるんだって。それを今風にアレンジしたってわけ。

晃一 へー、おじいさんがねえ。よくやるなあ。「核を持つ者は、皆、核で滅ぶ」か。よし、おれもやってみるか。

(効果音) (口々に署名を呼びかける声)

ナレーション みんなに混ざって大声を出しているうちに、なんだかおれも、すがすがしい気分になっていった。そして、1時間ほどたったころ。

通行人(女)1 ちょっとちょっと、あの子、どこかで見たことない？

通行人(女)2 あら、そう言えばそうよ。ほら、この間、中学生たちに乱暴したっていう。

通行人(女)3 あの子、痴漢じゃない？ ま、いやだわ。どうしてそんな子が署名運動なんかしてるのかしら？

通行人(男) なんだ？ どうしたんですか？

通行人(女)1 いえね、ほら、あそこに立ってる若い男の子、実はね…。

通行人(男) へー、分からんもんだねえ。そんなおかしな子が、なんでまたねえ。

直美 長谷川君、気にしちゃダメよ。

晃一 あ、ああ。分かってる。

通行人(男) (わざと大きな声で)へー、痴漢を働くような不屈き者が、ご立派にも平和運動をねえ。え、笑わせるじゃないか。

晃一 言いたいことがあるんなら、はっきり言ってくれよ。

直美 ダメよ。落ち着いて。

通行人(男) ああ、言ってやるよ。この不良学生が。

晃一 なんだと、この野郎！

(効果音) (晃一、つかみかかり、ケンカに)

通行人 (口々に)「キヤー！」「止めてえ！」etc.

(音楽) (ブリッジ)

直美 あーあ、派手にやっちゃって。

晃一 悪いな。またお前んちに押しかけて。

直美 いいってば。その顔じゃ帰れないでしょ。それに、元はと言えば、あたしが頼んだんだもん。責任感じちゃうわよ。

祖父 やあ、いらっしゃい。えーと、長谷川君、だったかな？

晃一 あ、どうも、すみません。ご迷惑かけて。

祖父 いやいや、ひどい目に遭ったそうじゃないか。大変だったね。しかしな、君はまさか、これぐらいのことで、やめたりせんだろうね。

晃一 それを言われると、つらいです。確かに、あいつらの言ったことは嫌がらせだし、真実は違うんだから、いいじゃないかって、何度も自分に言い聞かせたんです。だけど、ついカーッとなっちゃって。この手が…。「剣を取る者は剣で滅ぶ」って聖書の言葉に、おれ、自分なりに感動したつもりだったのに、やっぱり、おれなんか、伊藤と、いや伊藤さんなんかと違って、「戦争反対」なんていう資格、ないスね。

祖父 いや、それはどうかな。なあ、長谷川君。戦争の本当の原因は、なんだと思うね？



晃一 本当の原因、ですか？ それは、やっぱ、政府の考え方とか…。

祖父 いや、本当に戦争を引き起こすもの、それは、人間一人一人の心の中にある、“罪”じゃないかな？

晃一 “罪”？

祖父 ああ、そうだ。聖書はな、すべての人が罪を持っている、と教えているんだよ。そして、それは人間自身の力ではどうにもならない、とね。

直美 よく分からないけど、例えば、自己中心とか、そういうこと？

祖父 そうさね。長谷川君は今、「自分には資格がない」と言っとったがね。この世に、そんな資格のある者なんか、一人もいやしないさ。いや、むしろ、自分がどんなに罪深いかを知っている者こそ、真の平和を叫び得るんじゃないのかね？

晃一 真の、平和ですか？

祖父 ああ。真の平和。それは、罪ある人間がつくり出せるものじゃない。きよい神のみ子、キリストのみがもたらしてくれるものだがね。

ナレーション 伊藤のおじいさんの話は、よく分かったとは言えない。だが、なんだかジーンと来た。自分でも驚いたことに、その時のおれには、「自分がやってやる」という思いは、すっかり消えていた。ただ、なぜだか知らないけど、まるで内側から、見えない力の押し出されるように、道行く一人一人に、平和を叫びたい気持ちでいっぱいだった。いや、それは、外に向かってと言うより、本当は、うまく言えないけど、おれの内なる“戦争反対”、そう、自分自身への“平和宣言”だったのだ。

朗読 聖書の言葉。「キリストこそ、私たちの平和であり、2つのものを1つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。」(エペソ人への手紙2:14、15)

< 完 >